



## 本を読むことの素晴らしさ

今年7月、お笑い芸人のピース・又吉さんが芥川賞を受賞して大きなニュースになったのをきっかけに、受賞作「火花」の単行本や掲載雑誌などが、飛ぶように売れるという現象が起きました。そして、コメンテーターたちがTVなどで「これをきっかけに、読書の楽しみが多くの人に広がればいいですね」といったコメントを、まるでしめし合わせたかのように披露していたのを見て、改めて“読書離れが進み、本が売れない”という現状を感じてしまいました。

かくいう私も、近年読書量が減っているのを実感していますが、子どもの頃は本を読むのが好き過ぎて、夜更かしして親によく怒られていた記憶があります。いったん布団に入るものの、続きが気になって枕元の小さな明かりでこっそり読むことを続けた結果、小学三年生でいわゆる「ど近眼」になってしまい、今に至るまでメガネやコンタクトレンズにお世話になるハメに…。当時は「シートン動物記」や「ファール昆虫記」といった科学系のノンフィクションが大好きで、それらに出て来る動物や昆虫を想像しては、ワクワクしたものです。

その後、中学生の頃は教科書に出て来た星新一さんのショートSFが気に入ったのをきっかけに、小松左京さんや眉村卓さんなどのSFにのめり込んでいきました。私は非常に気が強いというか自信のあることを押し通す面があります。夏休みの課題図書があまりにもつまらなかったもので、勝手に小松左京さんの小説について感想文を書いて提出し、怒られたこともありました。よく怒られる子どもでしたね（笑）。

そして高校生になると、運命ともいえるような本やエッセイと出会います。前者は吉村昭さんの「ポーツマスの旗」という歴史小説で、明治時代の外相・小村寿太郎の生涯や海外要人との交渉術が迫力ある文章で綴ってあり、いっぺんで吉

村さんの大ファンになってしまいました。

また、後者は国語の教科書に載っていた外山滋比古さんのエッセイで、物事の考え方をいろいろと変えてみる新しさなどについて書いてあったと記憶していますが、それにも深い感銘を受けました。以来、お二人の著書は私の道しるべの大きな柱となって、読むたびに人生の歩むべき方向を照らし続けてくれるような、勇気ももらっています。先ほど、自分の読書量が減っていると書きましたが、正確にはお二人の著書を読み返すことが増えたため、新刊を手取る回数が減った、というのが正しいかもしれません。

さらに、私は大学生の頃吉村さんたちの著書を「持ち歩きたいが重くてかさばる」という問題解決のため、ノートに気に入った文章を書き写すこともよくやっていました。今でしたら、携帯電話にダウンロードしておけばどこでも読めますが、コピーすら高かった時代は書き写すしかなかったのです。しかし、この作業は後になって文章を書く仕事に非常に役に立ちました。というのも、画家や漫画家が名作の模写をして学ぶように、文章のリズムや書き方などが自然と身に付いているのを実感したからです。

私にとって読書は限りない想像力を育み、人生の道しるべとなり、仕事にも大いに役立っています。改めて振り返ると、本当に素晴らしい趣味であるといえるでしょう。季節は折しも秋。ぜひ皆様も、読書に親しんでいただければと思います。そして面白い本があれば、私にも教えてください。くだされば幸いです。



じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(バジリコ、07年)